

地方国立大学におけるフューチャーセンターの意義
と役割：

「静大フューチャーセンター」の実践を通じた地域
連携の観点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇賀田, 栄次 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009474

論文

地方国立大学におけるフューチャーセンターの意義と役割 ——「静大フューチャーセンター」の実践を通じた地域連携の観点から——

宇賀田 栄次*

1. はじめに

近年、課題解決やイノベーション創造の場としてフューチャーセンターが注目されている。フューチャーセンターとは「参加者が持ち込んだ課題を未来志向で解決する場」（国保 2012）、「未来を創造する対話の場」（堀内 2012）、「多様な人が集まり、良い対話をするための専用空間」（杉野ら 2015）などと定義され、日本では富士ゼロックス社などの企業や自治体での取り組みのほか、大学での導入例も増えてきている。特に地方国立大学においては、地域連携、あるいは地域協働組織が中心となりフューチャーセンターを設立する動きが見られる（徳島大学地域創生センター、岐阜大学地域協学センター）。

静岡大学（以下、本学）では2013年8月に「静大フューチャーセンター」（以下、静大FC）が発足したが、大学の多くが組織主導型であるのに対して、静大FCは学生が中心となって運営を担う学生主導型である点が大きな特徴である。本稿では、フューチャーセンターの誕生ルーツを改めて整理した上で静大FCの事例報告を行うとともに、地域連携の観点から、地方国立大学におけるフューチャーセンターの意義と役割を考察する。

2. フューチャーセンターとは何か

2.1. フューチャーセンターの誕生

フューチャーセンターは、スウェーデンを本拠地に世界20か国以上で保険事業を展開するスカンディア社が、1996年に同国ストックホルム郊外のヴィラを改築し開いた「知的資本」を創造する実験場が発祥とされる。

「知的資本」とは、知的資産ともいわれ、経済産業省では、「知識経済下において、企業の超過収益力あるいは企業価値を生み出す源泉であり、有形でないもの」（経済産業省 2005）と定義されている。蔣麗華（2000a:6）によれば、「知的資本（Intellectual Capital）」という概念が、最初にビジネス・メディアに登場したのは1991年のフォーチュン誌（アメリカ）であり、それまで資本といえば財務資本だけを指した時代から、目に見えない企業独自の頭脳ともいふべき知的資本がその企業の価値や競争力となる時代へと変わることが指摘されたという。

スカンディア社はその頃すでに知的資本に注目した経営を目指す世界での先駆的企業として知られ、1991年、世界初のIC（Intellectual Capital）ディレクターという役職をおき、レイフ・エヴィンソン氏を迎えた。同氏は長年スウェーデンで経営・人材育成・コンサルティングに携わっており、入社後同氏が中心となって社内での知的資本の定義、体系化が進められた。そこでは、知的資本を「人間が未来の価値創造に生かすことのできる（capital）、経験から得たさまざまな識見（inter + lectio:獲得した知識のつながり）」と定義（蔣 2000b:11）し、大きくは人的資本（Human Capital）と構造資本（Structural Capital）に分かれ、さらに構造資本は、顧客資本（Customer Capital）と組織資本（Organizational Capital）に分けられるとした。

その上で、エドヴィンソン氏は、フューチャーセンターを「構造資本の捉え方を『ナレッジ創造の場』

* 静岡大学学生支援センター准教授

にまで拡大し、未来のワーク・プレイスのプロトタイプを作る実験」(蔣 2000b:19)だったとしている。また、「どうしたら、経営層の意識をもと未来の知的資本に向けられるだろうか」(野村 2012a:19)と考えていたとされる。

現在、優れた経営ツールとして知られる「スカンディア・ナビゲータ」も、同氏が関わったとされ、図1のように家の構造に例えられる。

これによれば「財務焦点」は過去の価値を表すエリア、「顧客焦点」「人的焦点」「プロセス焦点」は現在の価値、そして「革新・開発焦点」が未来の価値を表すエリアとされる。

つまり、工業化社会から情報化社会を経て、知識社会、あるいは知識基盤社会に変化している現代においては、過去の価値ではなく、未来の知的資本となる価値について議論することこそ経営層の役割であり、その価値を生み出す場として、フューチャーセンターを誕生させたと考えられる。

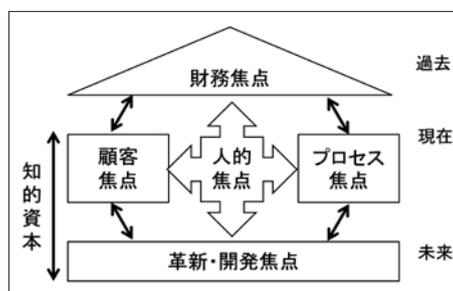


図1 スカンディア・ナビゲーターの構造
(出所) リーフ・エドビンソン、マイケル・S・マローン、高橋透訳『インテレクチュアル・キャピタル(知的資本)―企業の知力を測るナレッジ・マネジメントの新財務指標』(1999)

2.2. 「場」としての価値と意義

フューチャーセンターの機能である「場」とは何であろうか。

知的資本経営と同じく知識社会の経営論を説く野中郁次郎らは、経営での「ナレッジマネジメント」を提唱し、それを「知識の共有・移転、活用プロセスから生み出される価値を最大限に発揮させるための環境の整備とリーダーシップ」(野中・紺野 1999:54)と定義した上で、その構成においても「場」の重要性を提起している。「場」とは「共有された文脈―あるいは知識創造や活用、知識資産記憶の基盤(プラットフォーム)になるような物理的・仮想的・心的な場所を母体とする関係性」(野中・紺野 1999:161)と規定し、その例として「その場にかかわる人々の関係性」(野中・紺野 1999:162)が形成されるものでもあると説明している。

また野村はフューチャーセンターを「未来の知的資本」を生み出すために「人が成長し、アイデアが創出され、人のつながりが生まれる場」(野村 2012a:22)と表現し、堀内は「人と人がつながる」ことの本来的な可能性を引き出してくれる、それがフューチャーセンター」(堀内 2012:49)としている。

すなわち、フューチャーセンターの機能である「場」とは、物理的な空間だけを指すのではなく、人と人との関係を生み出すという価値が含まれている。

スカンディア社で始まったフューチャーセンターは、その後ヨーロッパ各国の企業や公的機関で広がりを見せる。上野らの研究(2013)によれば、例えばデンマークでは、商務・成長省(Ministry of Business and Growth)、雇用省(Ministry of Employment)、税務省(Ministry of Taxation)の3省が「マインドラボ(Mind Lab)」というフューチャーセンターを共同で所管している。ここでは、省庁の官僚に対して市民の視点からの意見が提供、収集できることを目指している。また、オランダにはヨーロッパ最大といわれるフューチャーセンターが道路水管理庁のもとに設置され、インフラ整備や維持に係る費用を効果的、効率的に活用できるよう議論や対話ができる工夫が施されているという。

これらは複雑化する社会課題の解決方法として、異なる省庁間や、行政と市民など立場を超えた関係者が協働することや、多様性を持つ人々の視点や意見を取り入れることが有効であると考えられるようになったことが考えられる。

一方、日本でのフューチャーセンターは、富士ゼロックス社KDI(Knowledge Dynamics Initiative)スタジオオなど企業から広がっていったが、その背景には国際競争力の低下など、経営スタイルの行き詰まりがあったと考えられる。すなわち、バブル崩壊後に経営スタイルの転換が求められるなか、財務指標(財務資本)が企業経営の評価と考えられ、表面的な成果主義やリストラクチャリング(事業の再構築)ばかりが先行

したことで、目に見えない知的資本が減少し、結果として企業価値が上がらない状況が続いていた。その解決方法として小国であっても国際競争力の下がらない北欧から広がった企業経営手法が注目され、知的資本の創造、課題解決、革新（イノベーション）などにつなげる手段として企業でのフューチャーセンターが注目されたと理解できる。

さらに「地域」という単位でのフューチャーセンターも広がってきた。それは1995年の阪神・淡路大震災を契機とした市民活動やボランティアの高まりから、1998年に特定非営利活動促進法（通称NPO法）が制定され、複雑化する地域や社会の課題に対して、行政とNPO法人との協働事業が日常化したこと、あるいは2011年の東日本大震災によって「何かできることはないか」と自立的に問題解決を図ろうとする個々の動きが広がった背景が考えられる。

なぜ、それがフューチャーセンターという「場」を必要とするのか。

国保によれば、フューチャーセンターの本質は「対話」とあり、「課題解決やイノベーションの創造といった、何らかの目的を帯びた対話のための空間」（2012:2）とも再定義し、「解決策の時間軸」と「対話の参加者」をその特徴としている。そのことは裏を返せば、企業経営も地域で起こる課題も現在や過去の視点から離れることができず、また対話が生まれにくいなかでの近視眼的な意思決定を迫られているということが考えられる。

だからこそ、国保が『「場」は主催者の姿勢を表す端的な方法』『参加者の意識を変えるという行為そのものが重要』（2012:2）と示す通り、参加者が今後の課題解決に向けて主体的に取り組む、すなわち現在から未来へ視点や意識を切り替える象徴として、フューチャーセンターの「場」の意義があり、必要とされる理由なのであろう。

3. 静大フューチャーセンターの取り組み

3.1. 発足の経緯

静大フューチャーセンター（静大FC）は2013年8月に発足したが、大きな影響を受けたのは静岡県立大学国保研究室で行われている「KOKULABOフューチャーセンター」（以下、KOKULABO）である。国保研究室ではゼミ活動としてフューチャーセンターを開催しているが、参加者はゼミ学生のほか、外部の社会人や他大学の学生も含まれ、静大FC発足の中心となった本学の学生Aもその一人だった。

学生Aは当時学部4年生で、前年に筆者が担当する学際科目を履修した縁で、履修後も進路相談などで意見を交わす学生だった。Aは理学部の学生だったが、「棚田研究会」というサークルでも部長を務めるなど「地域活動」や「コミュニティづくり」にも関心があり、KOKULABOにも参加していた。ある日Aから、地域活動に関心のある学生は本学にも多い一方で、活動のきっかけが少ないことを理由に本学でフューチャーセンターができないのかと相談を受け、筆者の研究室を会場として開催することを提案した。

筆者も国保研究室へ足を運んだことがあり、KOKULABOの活動も知っていたが、フューチャーセンターについては十分な知識があったわけではない。しかし、キャリア教育・支援を本務とするなか、社会に出ることや社会人と交流することに戸惑いや不安を感じる学生が少なくないと感じており、フューチャーセンターがその払拭の機会になることが想像できた。また、インターンシップで学生を受け入れた企業からの学生に対する高い評価から、日常的に学生と社会人とが交流、接点を増やすことで世代間の価値観のギャップなどの解消にもつながると考えていた。

このようなお互いの思惑が一致し、Aと筆者がそれぞれに呼びかける方法で参加者を集め、第1回の静大FCを開催した。

3.2. 静大FCの構成要素

野村はフューチャーセンターの構成要素として以下の4つを挙げている（野村 2012b:38）。

- ①空間：立場の違う、多様な人たちがいつでも課題を持ち込みオープンに対話できる、創造的な空間

- ②ファシリテーター（創造を促す人）：フューチャーセッション（対話の場）で対話を促進する
- ③方法論：様々な対話の手法や問題解決の方法論を目的に応じて活用する
- ④おもてなし：通常の会合とは異なり、おもてなしの心で、人としての関係性づくりを促す

これらについて、静大FCの特徴を整理すると次のようになる。

①空間

狭義には筆者の研究室内部がこれに当たる（図2）。

1.8m幅のホワイトボードのほか、イラストや写真を壁に貼り、セッション（対話）中は常に音楽を流すこと以外は創造的空間として意味づけられる特別な工夫がないばかりか、研究室内の対話スペースが2m四方ほどしか確保できていない。恐らく「日本一狭いフューチャーセンター」であろうが、オープンな対話にはむしろ有効だとも捉えられる。

ただし、広義には地方国立大学という空間で理解するとその意味は深まる。大学は外部からは「敷居が高い」印象があり、なかでも国立大学は全体的に建物も古く、「堅い」印象も持たれる。その分、外部の方がフューチャーセンターを通じて大学を身近に感じることができれば「開かれた大学」としての意義は大きい。また、総合大学として理系文系など多様な専門分野で学ぶ学生との交流ができることも外部の方から見た価値がある。



図2 静大FC開催風景

②ファシリテーター

発足当時は学生Aがファシリテーターとなり、セッションを進めたが、学生Aが積極的に他の学生ファシリテーター養成にも取り組み、自主的な勉強会なども開くことで、複数のファシリテーターが誕生し、静大FCの認知も学内外で少しずつ広がった（図3）。

③方法論

学生ファシリテーターたちは、KOKULABOで新たな手法を学んだり、社会人に教えてもらったりしながら対話の手法を活用するとともに、参加者にも協力を求めながら問題解決の場づくりに取り組んだ。角田は、フューチャーセンターの対話のメソッドとして14の方法を挙げている（角田 2012）が、中でも「チェックイン／チェックアウト」「サークル」「ストーリー・テリング」「ワールド・カフェ」「マルチ・ファシリテーター」「リフレクション」はよく使う手法である（図4）。



図3 ファシリテーション勉強会の資料

④おもてなし

おもてなしについては、学生の本領が発揮される。まず、静大FC開催を告知するfacebookページでは、学生らしいメッセージ表現で内容が書かれ、最後には必ず「皆さまのご参加を心からお待ちしております！」と付ける。次に参加者からの参加費（学生300円、社会人1,000円）を運営費用としてジュースやお菓子を準備するほか、「今日のおつまみ」としておにぎりやパン、お弁当などを用意する。参加する社会人からの差し入れも多く「美味しいフューチャーセンター」を自称している。また、会場前にはウェルカムボードを置き、



図4 ワールド・カフェを使った対話の様子



図5 今日のおつまみ（左）とウェルカムボード（右）

入りやすい雰囲気づくりにも努めている (図5)。

さらに静大FCでは上記に加えて、2つの構成要素について触れたい。

⑤学生ディレクター

静大FCの運営は学生が行っている。学生Aを含めてこれまで三代のべ9名の学生ディレクターが静大FCの運営を行ってきた。ディレクターの役割は、開催を主催するとともに課題を持ち込む方 (アジェンダオーナー) との事前打合せ、開催告知 (facebook、twitter)、おつまみの買い出し、当日のファシリテーター、会計、セッションのSNS投稿、会終了後のレポート (facebook) までを分担して行っている (図6)。



図6 ファシリテーターとしての学生ディレクター

⑥ビジョンとセッションのルール

学生ディレクターたちが主体的に運営に取り組み、また後輩に引き継ぐなかで静大FCのビジョンやルールも明確にしてきた。2014年11月、学生Aから運営を引き継いだ二代目ディレクターたちと翌年運営の中心を担う三代目ディレクターたちが対話を通じて描いた静大FCのビジョンは

様々な人が出会い、多様性を認め、新しいつながりや視点が生まれる場を常に作っていくことで、より良い未来の実現を目指す

<p>多様性 diversity</p> <p>対話 dialog</p> <p>未来志向 future</p>	<p>多様性 diversity</p> <p>立場、背景、年齢、性別の違いを認識しよう 違う見方、考え方、意見を尊重しよう 専門家ではない視点からの思いを口にしよう + 自主性 Voluntary</p>
<p>対話 dialog</p> <p>意見やアイデアには積極的に共感しよう 反応することで多くのアイデアを引き出そう 発言は短く、より多くの意見を聴めよう + 対等性 equality</p>	<p>未来志向 future</p> <p>過去の事例や経験を積み上げるだけでなく、 守ることができる、現実なものからだけで考えず、 「こうありたい」と思う未来から考えよう + それがフューチャーセッション</p>

図7 静大FCのセッションのルール

というものだった。これが今でも静大FCを支えるビジョンとなっている。

そして、ビジョンに向かうためのセッションのルールが、「多様性」「対話」「未来志向」である (図7)。

3.3.これまでの取り組み

静大FCは、月に1-2回の定例会と番外編と呼ばれるイベントを行ってきた。番外編は、静大FCが企画するものや他の組織団体と共同開催するもの、フューチャーセンターのファシリテートを依頼されるものなどがあるが、2年目以降は他からの依頼が増えた。これまでの開催をまとめたものが表1である。発足から2年5か月で定例会38回、番外編18回を数える。

4. 地域連携とフューチャーセンター

4.1.大学の第三の使命

「地域貢献」「社会貢献」が大学の使命として明確に打ち出されたのは2005年1月の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」であった。答申では「大学の社会貢献 (地域社会・経済社会・国際社会等、広い意味での社会全体の発展への寄与) の重要性が強調されるようになってきている」とし、「こうした社会貢献の役割を、言わば大学の『第三の使命』としてとらえていくべき時代」と示した。続いて、翌年の教育基本法改正でも、大学に関する条文において「成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」と規定された。さらに2012年6月に文部科学省から出された「大学改革実行プラン」では「地域再生の核となる大学づくり (COC (Center of Community) 構想の推進)」が掲げられ、地域と大学との連携は大学改革のなかでも大きなテーマとなっている (本学においても2015年9月「地 (知) の拠点大学による地方創生推進事業」に採択された)。

表1 これまでの静大フューチャーセンターの開催

回	開催日	アジェンダ	回	開催日	アジェンダ
vol.1	2013.8.16	・コミュニティ・カフェ企画—どんな価値があれば人は訪れるのか するが夢倶楽部さん—学生と一緒に商品企画したい ・静岡のFCはこうなるといいんじゃないか！提案ブラッシュアップ	vol.25	2014.11.28	・サークルでのモチベーションの保ち方
vol.2	2013.9.27	・提案型の防災アンテナショップを目指したい ・グローバル人材って何？ ・ポジョレヌーボー解禁に向けたイベントをやりたい	vol.26	2014.12.22	・お茶の流通消費を考える
vol.3	2013.10.18	・ポジョレヌーボーイベントのブラッシュアップ ・「里山」ってどんな感じ？ ・大学生が商品開発・販売に関わりやすいプログラムは？	vol.27	2015.1.23	・静岡＆三保らしいおもてなしを考える
vol.4	2013.10.25	・「里山FC」で観客を巻き込みたい ・ポジョレヌーボーイベント企画の仕上げ ・するが夢倶楽部の商品〇〇のリニューアル	vol.28	2015.1.30	＜ホビーのまち静岡のPRを考えるFC＞ in ホビースクエア ・ホビーのまち静岡のPRを考えよう
番外	2013.11.2	＜里山フューチャーセンター(KOKULABO FCと共同開催)＞ in七間町アトサキセブン ・里山ってどんな感じ？ ・2020年オリンピックの年に里山の魅力を伝え、足を運んでもらうには僕らは何が出来るだろう？	番外	2015.2.16	＜介護の未来ナビゲーター×静岡時代×静大FC②＞ in静岡県庁 ・大学生に「介護職に就きたい」と思ってもらえる事業って？
vol.5	2013.11.7	・高校生のキャリア支援ワークショップのコンテンツ するが夢倶楽部×静大FCで商品開発	番外	2015.2.23	＜第2回 プロジェクト市場＞ in静岡産学交流センター ・松崎町でのフューチャーセンターを成功させたい ・山梨県と静岡県との交流をカタチにしたい ・スマホマナーを一緒に考えよう
vol.6	2013.11.29	・梅ヶ島で学ぶ学生が手もみしたお茶をどう売るか ・地域コミュニティが衰退するとどんな不安なことが起こる？	番外	2015.3.16	＜介護の未来ナビゲーター×静岡時代×静大FC③＞ in静岡県庁 ・「介護職に就きたい事業」ブラッシュアップ
vol.7	2013.12.20	・三保の松の保全について ・出張FC 自治体でFCをやるとどんなことが起こるだろう？	vol.29	2015.3.20	・就活×靴着！ シューカツと就活 ・静大FCの魅力ってなんだろう？
vol.8	2014.1.17	・西伊豆松崎町石部の棚田の保全について ・北海道と静岡の可能性を考えよう	番外	2015.3.29	＜松崎町の未来を一緒に考えようFC①＞ in松崎町生涯学習センター ・松崎町の魅力を教えて！
vol.9	2014.1.31	・大谷コミュニティハウスについて ・しずおか祭りをもっと盛り上げたい	番外	2015.3.30	＜松崎町の未来を一緒に考えようFC②＞ in松崎町生涯学習センター ・松崎中×松崎高×静大で 松崎町のこれからを考えよう
vol.10	2014.2.12	・三保松原の取り組みについて ・静岡産の干し芋を売ろう ・「石部棚田の危機」の報告	vol.30	2015.4.16	・訪日観光客が静岡県を素通りせずにもっと来てもらうためには、どのような取り組みが必要だろうか？
vol.11	2014.3.4	・「〇〇カフェ」「イベント」以外で何が出来るだろう ・店舗という限られたスペースでできるお客様との「交流企画」とは？	番外	2015.4.25	＜僕らが笑く「静岡で働く未来」フューチャーセッション(ESUNEと共同運営)①＞ in静岡産学交流センター ・若者が流出する静岡ってどうなんだろう
vol.12	2014.3.25	・今回の雪害に伴う山梨県への支援方法について	番外	2015.4.26	＜第1回静岡県カレッジサミット(主催:静岡時代)＞ inMIRAEリアルコミュニティホール七間町 ・学生大会議「出張フューチャーセンター」 ・静岡の未来を考えたいとき、私たちはどんなことができるだろう？
vol.13	2014.4.10	・ハワイアンカヌー駿河湾横断プロジェクトについて ・伝馬町の発展とは？	番外	2015.5.9	＜僕らが笑く「静岡で働く未来」フューチャーセッション(ESUNEと共同運営)②＞ in静岡産学交流センター ・若者が輝く静岡にしたい
vol.14	2014.4.25	・静岡県青少年会館のフリースペースをどう使うか？ ・繁田さんの新店舗「人」を呼ぶにはどうしたらよいか？	vol.31	2015.5.21	・大道芸ワールドカップの価値、学生ボランティアに対する価値とは？ ・大道芸ワールドカップや学生ボランティアについて大学生に広く知ってもらえる方法ってなんだろう？
番外	2014.5.10	＜学生が考える防災フューチャーセンター＞ in静大生協第一食堂前 ・静岡県の防災はどうなっている？ ・学生は防災にどう関わっていいけるだろうか	vol.32	2015.5.28	・静岡×森林×未来を考えよう
vol.15	2014.5.16	・静岡時代の新企画 ・山梨県人会について	vol.33	2015.6.25	・日常で考える〇〇と人権
vol.16	2014.5.30	・有精卵の事業開発について ・キャリアカウンセラーと大学生の交流・研修企画	番外	2015.7.9	＜KOKULABO FC×静大FCコラボセッション＞ in静岡県立静岡農業高校調理室 ・松の葉を用いた食品アイデアを実際に作ってみよう！
vol.17	2014.6.13	・どんなプロジェクトなら参加してみたいと思うか？ ・学生同士の就活支援はどんなことができるだろう？	番外	2015.7.16	＜緊急会合 静大FC 2周年記念パーティー23日前祭＞ ・静大FC 2周年に向けた井戸端会議
vol.18	2014.6.27	・「美人粥」をお土産/ギフトとして売っていくには？	番外	2015.8.8	＜静大FC 2周年記念パーティー＞ in静大生協第一食堂 ・大人の自由研究を考えよう！
vol.19	2014.7.18	・畑でできることってなに？	番外	2015.8.11	＜静岡大学社会教育主事講習(主催:静岡大学地域連携・生涯学習部門)＞ in静岡図書館会議室 ・若者、青少年と社会参加について考えよう
vol.20	2014.8.9	＜静大FC 1周年記念パーティー＞ in静大生協第一食堂 ・近い将来、静大FCができるワクワクすることをみんなで考えよう	vol.34	2015.8.31	・新聞の未来を考えよう① 新聞ってどんな存在？
vol.21	2014.9.12	・静大生が考える大学生のための災害メニュー	vol.35	2015.9.17	・「静岡くらしの足研会」にもっと良いネーミングはないものか ・どうやったら「オーガニック野菜」が広がるだろうか
番外	2014.9.26	＜第1回 プロジェクト市場＞ in静岡産学交流センター ・静岡に来る観光客を増やし、満足してもらいたい ・静岡マラソンのボランティアを確保し、トラブルをなくしたい ・「学生図鑑」を一緒に作りませんか	番外	2015.9.29	＜みえの少子化対策を考えるフューチャーセンター＞ in三重県津市アストプラザ ・みえの少子化対策をもっと深めていきたい
番外	2014.10.19	＜里山フューチャーセンター(KOKULABO FCと共同開催)＞ in静岡市足久保グラウンド ・里山大学 ・里山×〇〇=授業を創ってみよう	vol.36	2015.10.8	・新聞の未来を考える② 新聞との付き合い方～新聞という恋人～
vol.22	2014.10.24	・「しあわせ野菜畑」でこんなことをやりたい ・災害食を考えよう	vol.37	2015.11.16	・大学生の悩みに「ピアサポート」を取り入れられないだろうか？ ・大学生はどのような悩みを抱え、普段はどのように乗り越えているのだろうか？
vol.23	2014.10.31	＜介護の未来ナビゲーター×静岡時代×静大FC①＞ ・静岡の介護の未来を考えよう	vol.38	2015.12.10	・東静岡駅周辺のコミュニティづくり
vol.24	2014.11.14	・学生が利用する情報チャネルはなんだろう？ ・今の学生のモチベーション要因～今、何が盛り上がるのか？～	番外	2016.1.15	＜介護の未来ナビゲーター×静岡時代×静大FC④＞ in静岡県庁 ・自分達(大学生)に必要な介護学を考える

(2016年1月29日現在)

これらの動きの背景には、知識基盤社会を支える高等教育政策の転換や18歳人口の減少などによる大学経営の見直しなどが一般的に挙げられるが、地域社会における変化も忘れてはならない。

先に述べたように、1995年に起きた阪神・淡路大震災で多くの市民が災害ボランティアとして活動したことなどから「ボランティア元年」とも呼ばれ、地方行政においては「ガバメントからガバナンスへ」という表現がよく使われるようになった。すなわち山本が指摘するように、地域社会は「行政が主導する社会から、多様な経営主体が協働する社会へと変容しつつある」(山本 2012:7)ということである。

したがって、大学における社会貢献、とりわけ自治体との連携を考えると、「行政職員との連携」だけでなく「多様な経営主体」、例えば住民や地域の商工業者、NPO法人等が連携「相手」になることも想像しなければならない。

4.2. 自治体から見た大学の「連携相手」

では、自治体は大学の誰(どこ)を連携「相手」と見ているのであろう。阿部(2008)は、大学の地域貢献項目について、自治体(市町村)からの期待度と大学自身が考える重要度を比較分析した。29項目について4件法での回答選択肢にポイントを与えた順位をそれぞれ出し、比較したものが表2である。

これによれば、大学自身が考える最も重要な項目は「実践に役立つ専門的知識・技能を有する人材養成」であるのに対して、自治体(市町村)からの期待が最も高いのは「学生の社会貢献活動(ボランティア活動等)を推進」であった。しかも大学が1位に挙げたものは自治体からは7位であった。

このことから阿部は「地域が大学に求めている地域貢献の役割が、単なる「アドバイザー」よりむしろ「サポーター/パートナー」であることを示唆する」(阿部2008:6)とし、「問題は、地域貢献・交流の資源としての学生への高い期待を、大学自身が必ずしも把握していないこと」(同)と指摘している。

学生主導型のフューチャーセンターはまさしく自治体が期待する要素を含んでおり、そのことは2015年2月に賀茂郡松崎町で開催された、本学の「地域課題解決支援プロジェクト」シンポジウムにおける静大FCの取り組み発表によって実感した。

発表を聞いた地元住民の方から「松崎町でもフューチャーセンターができないか」と相談され、翌月に再び松崎町を訪問し、学生がファシリテーターとなって、商工会や農業再生協議会、猟友会、婦人会などそれぞれのコミュニティで活動する住民14名と一緒に、「松崎町の自慢」をまとめるワークから「未来の松崎町」について意見を交わした。

同じような問題意識や意見を持ちながらもコミュニティを超えたメンバーが地元の未来について語る機会はこれまでほとんどなく、学生たちが対話を促すことでそれぞれの思いや考えの理解が進んだ。学生主導のフューチャーセンターが果たせる地域貢献のひとつの方法だと考えられた。

ただし、地域を変えるのは学生ではない。よく「よそ者」「馬鹿(ばか)者」「若者」が地域を変えると、変化を起こす主体はあくまで地域住民や行政の力、つまり「地力(じりき)」であることを忘れてはいけない。地力には「身にそなわっている本来の力」という意味があるが、それは地域の目に見えない「知的資本」ともいえる。知的資本を創造する場、すなわちフューチャーセンターの本来の目的を地域と大学が共有することが求められる。

4.3. 静大FCが果たせる役割

静大FCがこれまでのセッションで扱った数多くのアジェンダがすべて形となり、課題解決したわけではないが、フューチャーセンターを通じて、学生はそれぞれの課題に対して当事者意識をもって考え、主体的に関わってきた。つまり「自分事」として地域や社会を捉えてきたといえる。

一方で、参加する社会人にとっても大学を通じて学生と交わり、一緒に課題を捉えることでお互いの価

表2 地域に対する大学の貢献項目

地域に対する大学の貢献項目	自治体から大学への期待(順位)	大学が考える重要度(順位)
学生の社会貢献活動(ボランティア活動等を推進)	1	7
実践に役立つ専門的知識・技能を有する人材養成	2	1
幅広い教養を身につけた人材の養成	3	3
人間性豊かな人材の育成	4	5
公開講座の充実	5	6
大学教職員を市町村へ講師や助言者として派遣	6	10
生涯学習や教育の最新の動向等について情報提供	7	12
公開講座を市町村で行うこと	8	16
住民向けの講演会を実施すること	9	24
地域の活性化のためのプログラムを開発・提供	10	9
中・高校生を対象とした講演会やセミナーの実施	11	11
实际的、または実践に直結する研究の推進	12	2
留学生と地域社会との交流をすすめること	13	14
生涯学習の推進に関わる相談に対応すること	14	18
複数の大学・短大が連携してコンソーシアム	15	8
大学の研究成果をわかりやすく住民に公開すること	16	4
資格や免許を認定する講習を実施すること	17	29
公開授業の実施(一般の方が学部の授業を聴講)	18	26
地域の共通課題に学生・教職員が取り組むこと	19	22
基礎的・理論的な研究の推進	20	15
大学教職員が市町村の各種委員会の委員に	21	17
地域文化を全国に発信する際の手助け	22	23
学部、大学院で取得できる資格、免許を増やすこと	23	28
自治体職員や教員の研修の機会を大学が設ける	24	21
学部や大学院に夜間開講の授業を設けること	25	25
社会人入学の定員を増やすこと	26	19
卒業生が仕事上の相談に訪れることができる環境	27	13
自治体職員や教員が定期的に大学で研究や研修	28	20
他大学・短大との単位互換を進めること	29	27

(出所) 阿部耕也「大学と地域連携の要因分析の試み: 大学と地域との連携によるまちづくり調査から」を基に著者作成

値観を共有できる。地方国立大学における学生主導型のフューチャーセンターが果たす役割は多方面にあると考えられる。

2015年8月の静大FC2周年記念パーティーに向けて、学生ディレクターたちが「カウントダウン投稿」を企画した。これまで静大FCに参加してきた学生や社会人が毎日日替わりでカウントダウンの数字を写真に収めながらメッセージを送るというものである。その中でKOKULABO設立に携わったある社会人の言葉は、大学でのフューチャーセンターの役割を的確に捉えている。

静大FC 2周年、本当におめでとうございます！

2011年に県大国保先生と僕が当時のゼミ生と一緒にスタートした静岡県内初のフューチャーセンターは、同時に全国初大学生が運営主体のフューチャーセンターでした。その後じわじわと県内学生のみんなの意志で広がってきた静岡ならではのFCから毎日の様に続々とプロジェクト発足のニュースや成果の話を知ると嬉しくて溜まりません。

さて、なぜ大学でFCを始めるに至ったのか？

ますます複雑化する社会において、あらゆる人が学びながら協働できる「大学」は今後のコミュニティの中心的「場」になってイノベーションを推進する機関になりうる（ならなくてはならない！）と思ったからです。

特に日本は上下関係を重んじる文化ですので、老若男女が集まり、立場の垣根を越え対等な立場で話し合う事ができるFCに適した空間は大学以外にない、とも考えました。

私たちは与えられた環境に文句を言うのでは無く、楽しみながら粛々と環境を改善していくチームです。どんなに小さな課題でも構いません。もしあなたがまだFCに持ち込んでいないのなら、自分でよくよく考える前にフューチャーセンターのまな板に乗せ、みんなで笑いながら料理してしまいましょ～。

いつも言いますが、問題解決のプロセスはその問題の大小にかかわらず、そう違うものではないと考えます。場数を踏むことでもっともっと難しい問題を解決できるチームを育てていきましょうね！

5. 地方国立大学におけるフューチャーセンター

国立大学は第3期中期目標期間が始まる2016年度からは、各大学の「強み・特色の発揮を更に進めていくため、機能強化に積極的に取り組む」（国立大学経営力戦略 2015）ことが求められ、以下の3つのうちいずれかひとつを選択し、各大学の特色を明確にしながらかそれぞれの機能を高めることとなった。

- ① 主として、地域に貢献する取組とともに、専門分野の特性に配慮しつつ、強み・特色のある分野で世界・全国的な教育研究を推進する取組を中核とする国立大学
- ② 主として、専門分野の特性に配慮しつつ、強み・特色のある分野で、地域というより世界・全国的な教育研究を推進する取組を中核とする国立大学
- ③ 主として、卓越した成果を創出している海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を中核とする国立大学

なかでも①を選択する大学では、「地域活性化の中核」としての機能を高めることが求められ、「地方公共団体や企業等と連携して、実践的プログラムの開発や教育体制の確立など、『実学』を一層重視した、地域産業を担う高度な人材の育成を推進する」（教育再生実行会議第六次提言）対象となった。

加えて、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」では、東京一極集中と若者の地方からの流出を解消する取り組みが進められることとなり、上記①を選択する55大学のうち32校が採択された。この事業においては地方公共団体との連携による雇用創出や若者定着に向けた取り組み、さらに地域や企業と連携して地域課題の解決に積極的に取り組む大学が期待される。

フューチャーセンターは、地域課題解決に向けた役割が期待されるだろうが、それは学生たちが解決の

主役になることではなく、人と人との関係性を高めることで地域が「地力（じりき）」を発揮するための場づくりに貢献することである。

引用・参考文献

- 阿部耕也, 2008, 「大学と地域連携の要因分析の試み:大学と地域との連携によるまちづくり調査から」『静岡大学生涯学習教育研究』10, pp3-20.
- 大久保幸夫, 2000, 「いま, なぜ知的資本経営なのか?」, リクルートワークス研究所『Works』42, pp2-5.
- 岐阜大学地域協学センター フューチャーセンター (<http://www.ccsc.gifu-u.ac.jp/ccsc/index/futurecenter>, 2016年2月6日).
- 徳島大学地域創生センター フューチャーセンターA.BA (<http://www.tokushima-u.ac.jp/ct/aba/>, 2016年2月6日).
- 経済産業省, 2005, 「産業構造審議会新成長政策部会経営・知的資産小委員会 中間報告書」(http://www.meti.go.jp/policy/intellectual_assets/pdf/InterimReport-jpn.pdf, 2016年2月6日).
- 国保祥子, 2012, 「大学生の力を地域に活かす『大学発フューチャーセンター』」, 四国銀行『四銀経営情報』125, pp1-9.
- 蔣麗華, 2000a, 「『知的資本』の世界潮流」, リクルートワークス研究所『Works』42, pp6-9.
- 蔣麗華, 2000b, 「『スカンディア社の知的資本経営』徹底研究」, リクルートワークス研究所『Works』42, pp10-19.
- 杉岡秀紀・滋野浩毅・久保友美, 2015, 「京都市におけるフューチャーセンターを活用した次世代市民協働政策についての研究」, 公益財団法人大学コンソーシアム京都『2014年度研究成果報告』自由課題2 (http://www.consortium.or.jp/wp-content/uploads/seisaku/10012/2014houkokusyo_jiyuu2.pdf, 2016年2月6日).
- 中央教育審議会, 2005, 『我が国の高等教育の将来像(答申)』(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm, 2016年2月11日).
- 野中郁次郎・紺野登, 1999, 『知識経営のすすめーナレッジマネジメントとその時代』, ちくま書房.
- 野村恭彦, 2012a, 『フューチャーセンターをつくろう』, プレジデント社.
- 野村恭彦, 2012b, 「フューチャーセンターの本質:地域にフューチャーセッション文化を生み出す」, 公職研『地方自治職員研修』第45巻12号(通巻638号), pp38-40.
- 堀内一永, 2012, 「フューチャーセンター『未来を創造する対話の場』」, 横浜市政策局, 『調査季報』170, pp48-49.
- 山本幸一, 2012, 「大学と地域の連携マネジメントに関する一考察ー地域ガバナンス概念における多主体間連携に注目して」特定非営利活動法人全日本大学開放推進機構『UEJジャーナル』第4号, pp7-13.